『発掘宇治'11』

平成23年度　発掘調査・文化財速報

庵寺山古墳一般公開（11月）

文化財防火デー（宇治神社・1月）

旦椋遺跡・土器棺

園池跡
宇治市街遺跡（2月）

旦椋遺跡現地説明会（5月）

小・中学生の文化財見学会（11月）

宇治市歴史まちづくり推進課

幻の栗隈郷か！？

～ 洪水で埋もれた遺跡、旦椋遺跡・旦椋古墳群の発掘調査 ～

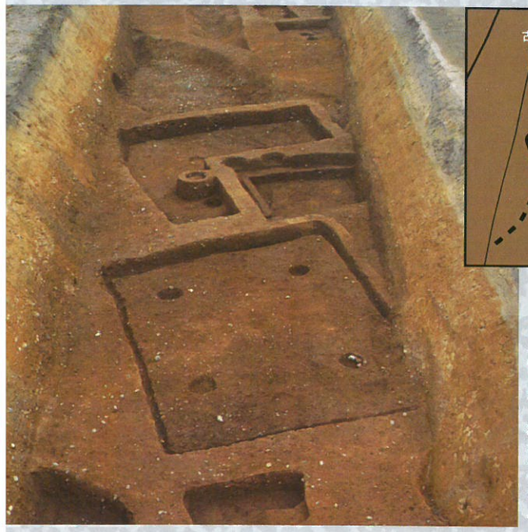
奈良時代に編纂された最古の歴史書『日本書紀』には、「栗隈（くりくま）」という地名が伝えられています。旦椋（あさくら）神社一帯に広がる旦椋遺跡のある大久保地区は、かつて久世郡で勢力を持っていた栗隈氏と関連の深い栗隈郷の中心地であったと推定されています。今年度の調査を含めて過去６回にわたる旦椋遺跡の発掘調査成果を中心に、幻の栗隈郷に触れてみたいと思います。

古墳に重複する住居

第６次調査（平成23年）

第６次調査では、古墳１基と竪穴建物６棟を発見しました。古墳は調査区内の北側で見つかり、全体規模の約半分を検出しました。墳丘が削られているためか、あるいは調査範囲外に位置するためか、遺体を納める棺などは見つかりませんでした。形状は直径20mを超える円墳と考えられます。

竪穴建物は古墳を削って、その上に建てられており、かつ同じ地点で複数回の建て替えが行われていました。古墳の築造時期と竪穴建物集落が形成された時間の差は四半世紀ほどで、この短期間に墓域から居住地域へと推移したことがわかりました。



◀竪穴建物の検出状況（北から）

▲旦椋遺跡周辺の古代の様子

旦椋遺跡調査地位置図

洪水で埋もれた古墳

第５次調査（平成19年）

旦椋遺跡の東端にあたる第５次調査では、洪水により埋没した古墳３基や竪穴建物跡等を検出しました。また古墳時代前期の建物跡や土器群が発見され、旦椋遺跡の始まりがこれまでの想定よりも古く、４世紀頃までさかのぼることがわかりました。

久津川古墳群を望む▲

５号墳の周溝からは、須恵器の硯の蓋が出土しています。出土例の少ない鳥形の蓋です。奈良時代のもので、硯は一般的な集落からはあまり出土せず、その特殊性が注目されます。

◀５号墳の検出状況（北から）

旦椋遺跡の発見と遺跡の状況

第１～３次調査（平成３～５年）

旦椋遺跡は、平成３年に行った市営住宅の建て替えに伴う発掘調査で発見された遺跡です。当初は中世の「大久保環濠集落跡」として発掘調査を開始しましたが、中世の遺構はわずか溝１本しかなく、６世紀後半の古墳や７～８世紀の集落遺構を検出し、大久保町周辺における拠点的な集落であることが予想されました。

平成４年には、遺跡の範囲確認を目的とした第２次調査が旦椋神社境内で行われました。約1.5mもの厚さの洪水層の下から13～16世紀の遺構を検出し、ちょうどこの頃に新造された旦椋神社の前身・栗隈天神社に関わるものと考えられます。

平成５年には第１次調査地の隣接地で調査が行われ、引き続き古墳群などの遺構の広がりが予想されましたが、特筆すべきものとして中世の鋳造遺構を検出しました。西は環濠集落の東限と推定される側溝、東にはかつて土塁があったとされることなどから、集落外の別区画に鋳造工房が営まれていたと考えられます。

◀土こう墓内遺物（第１次調査）

▶鋳造土こうの溶解炉底（第３次調査）

発掘調査からわかること

- 旦椋遺跡ではこれまでに７基の古墳が発見されています。今年度の調査により少なくとも300m四方の範囲に古墳が分布していることが明らかになりました。実態はまだ明らかではありませんが、おそらく数十基を超える古墳が埋没しているものと考えられます。そうすると南山城地域最大の後期古墳群となります。
- また、飛鳥時代の集落も古墳群とほぼ同じ範囲に展開していることが明らかになりました。旦椋遺跡の特徴は、古墳築造後あまり時を隔てていない段階に、古墳と古墳の間や一部古墳を破壊して住居をつくっていることです。一般的には、古墳を避けて集落を形成しており、旦椋遺跡の状況は特異なものです。
- このように古墳を壊してまで集落をつくるには、そうせざるをえない大きな要因が必要になります。その要因として考えられるのが「栗隈大溝」です。栗隈大溝は、右に示した『日本書紀』などの記事に見える灌漑用水で、仁徳期と推古期の２回の記事があります。
- この「栗隈大溝」については諸説があり、その実態はよくわかっていません。しかし『日本書紀』の記述にあるような歴史的・国家的事象が、旦椋遺跡の集落の変遷に密接に関わっているのではないでしょうか。

大溝（おおうなで）を山背（やましろ）の栗隈県（くりくまのあがた）に掘りて、以（もって）田に潤（つ）く

仁徳天皇十二年十月条

山背国に大溝を栗隈に掘る

推古天皇十五年是歳条

いろいろな棺

旦椋遺跡では、いろいろな棺が出土しています。

第１次調査では、古墳の周溝に円筒埴輪を転用した「埴輪棺」（写真上）。第５次調査では、須恵器の甕を使用した「土器棺」（写真中）。第６次調査では、土師器の甕と鉢を組み合わせた「土器棺」（写真下）が発見されています。いずれも大きさから乳児用と考えられます。

今年の文化財あれこれ

平等院旧境内遺跡の発掘調査

平等院は、永承7年(1052)に藤原頼通によって創建された寺院で、鳳凰堂以外にも数多くの堂舎が建立されました。また鳳凰堂南側の台地上には、平等院創建以前の塔ノ川遺跡が知られています。

今回の調査地はその台地上にある浄土院境内で、柱穴や土坑、明治時代頃の水琴窟(左写真)を検出しました。

史跡宇治川太閤堤跡の発掘調査

宇治川太閤堤跡は平成19年の発見以後、順次遺跡の範囲確認調査を行い、平成21年7月23日に国の史跡に指定されました。

今回の発掘調査は、遺跡の整備に向けた内容確認調査です。京阪宇治駅横の遺跡南端付近で明治期の煉瓦窯を2基検出し、護岸遺構周辺の様々な土地利用の状況が明らかとなりました。

小・中学生の文化財見学会

市内に残る多くの文化財をとおして郷土の歴史を学び、これらの文化財を将来に伝えていくために、宇治市文化財愛護協会と11月26日に第21回小・中学生の文化財見学会を開催しました。

今回は、市の南西に位置する広野地域の庵寺山古墳や広野廃寺、円蔵院などの文化財を15名ほどの親子でめぐりました。

あの遺物はいま! vol.1

出土遺物の洗浄と注記

発掘調査で出土する遺物は、遺跡や地域の歴史を考える上で重要な資料です。ここでは発掘調査の後に行われる整理作業について紹介します。

遺物を発見した時は泥だらけの状態です。土を落として遺物を観察しやすくするために「洗浄」し、発見場所の情報を遺物に書き込む「注記」を行います。いずれも細かい作業です。

平成24年3月10日発行
宇治市歴史まちづくり推進課
〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地